



井上公夫著 (2009)

シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ 第5巻

噴火の土砂洪水災害

—天明の浅間焼けと鎌原土石なだれ—

古今書院, 203p.

ISBN978-4-7722-3121-3 C3344

定価2,800円(税別)

2009年3月10日初版第1刷発行

天明三年の浅間噴火は、近世日本の火山活動の中で最も多く研究されてきたものの1つであろう。この噴火とそれに関連する災害に関しては膨大な史料が残されており、史料火山学と地質学の両面からアプローチできる好対象である。本書は歴史時代の斜面災害研究の第一人者である筆者が、長年続けてきた天明浅間噴火とそれに関連する土砂洪水災害に関する研究成果を1冊にまとめたものである。

数ある天明の浅間火山噴火に関する本の中で本書の大きな特徴は、「日本のポンペイ」と呼ばれる鎌原集落を埋め尽くした堆積物の由来について示唆に富んだ考察を行っていること、そして史料に記載された災害記録を表と地図によってわかりやすく読者に示していること、であろう。

鎌原集落を埋め尽くした堆積物は、かつて火砕流堆積物と解釈され、その後の研究により岩なだれ、あるいは土石なだれ堆積物 (debris avalanche) と改められている。表題のように筆者は土石なだれ堆積物と認める立場をとるが、その発生機構に関する考察が面白い。かねてから史料に基づいて鎌原土石なだれの発生源には噴火以前から池 (柳井沼) があったことが想定されていた。この池を筆者と共同研究者は地すべり頭部の陥没帯に水がたまったものと捉えるところから、新たな考察が導き出される。すなわち古い地すべり地に流れ込んだ溶岩の荷重が地すべりを再活動させ、さらに引きちぎられた溶岩が減圧爆発を起こした結果、地下水を多量に含む土塊が急激に滑動し、土石なだれとして流下したと筆者らは考察する。

天明の火山活動による犠牲者の大部分は、この鎌原土石なだれと天明泥流によるものである。上に述べた筆者らの考えによると、天明の浅間火山噴火がもたらした最大の災害は、単なる火山噴火でも土砂移動でもなく、両者が複合したことによってもたらされ

噴火の土砂洪水災害

—天明の浅間焼けと鎌原土石なだれ—

井上公夫 著



古今書院刊

シリーズ繰り返す自然災害を知る・防ぐ 第5巻

たということになる。この指摘は、火山災害の予測に重い問題を投げかける。地すべり地形は第四紀火山の山腹にごく一般的に認められるのである。

本書では、現象ごとに表と地図がわかりやすくまとめられており、災害の実態を読者が容易に理解できるように工夫されている。災害史料リストも巻末に付されており、これから研究を始めようとする人にとって利用価値極めて大であることは間違いあるまい。

古今書院の「シリーズ 繰り返す自然災害を知る・防ぐ」は、防災に関する啓蒙書であるとともに、歴史災害の実態を当時の人々の視点と現代科学の視点から捉える研究書である。本書は、シリーズの他の本と同様に多様な読者が様々な読み方で読むことができる1冊である。特に防災を目的として複雑な火山災害を概観してみたいと思う方には、火山地質図と本書を手巡検に出かけることをお勧めしたい。読者に配慮した使いやすい本であることが納得していただけるであろう。

(産総研 地質情報研究部門 小松原 琢)